

# ソ連極東南部のハクチョウ(I)

藤 卷 裕 蔵

秋から冬にかけて多くの渡り鳥が、北から日本へ渡ってくる、ハクチョウもその仲間である。最近、各地でハクチョウを観察している人々は、日本白鳥の会を結成し、保護や生態についての情報交換を行っている。生態の中では渡りに関連したことがとくに関心をもたれているが、北方の資料がほとんど知られていないのが現状である。そこで今回は、ソ連極東南部、サハリン、千島のハクチョウについて紹介してみたい。

## オオハクチョウ

### 1. プルジェヴァリスキーの時代に、オオハクチョウ

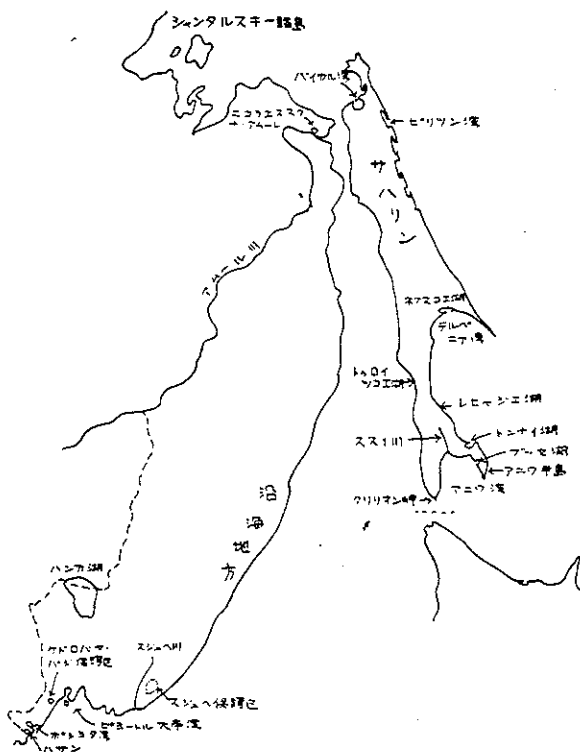


図1 沿海地方南部とサハリンの地名

はハンカ湖で営巣していたが、現在ではもう営巣していないであろう。現在営巣発見の可能性があるのは、アムール川下流域の湖だけである。1856年にシュレンクはアムール川下流域のマリンスクのやや上流で、5卵のある巣を採集した。

渡りのときウスリー地方でオオハクチョウは普通である。春には非常に早く沿海地方に現れ、この地方で、ある年にはすでに3月8日にみられたが、通常は3月中旬に渡来する。

私は1945年4月初めにハンカ湖でオオハクチョウの渡りを観察した。この日には大群が北方へ飛んだ。多くの渡りがシュリビン(1936)により1927年春にスイフン川河口部で観察された。この地域ではすでに4月初めにオオハクチョウが大量に渡り、その後渡りはおとろえ、4月16日になってふたたび大量に渡った。オオハクチョウは大群で渡るが、その場合いくつかの群は150羽に達する。これはこの年の渡りの最終日であった。

秋の渡りは10月と11月前半である。

プルジェヴァリスキーとヤンコフスキーの資料によると、オオハクチョウの一部は沿海地方南部の海岸で越冬する。残念ながら、現在ビョートル大帝湾における水鳥類の越冬についてはなんの資料もない。

2. サハリンで繁殖し、南千島では越冬する。渡り時には普通である。

3月末から5月初めまでオオハクチョウはアニワ湾で普通に見られる。渡りの群はススイ(鈴谷)川河口に長い間留まっている。レビャジエ〔白鳥〕湖では大群が4月中旬～5月中旬に見られる。1948、1949、1950年には4月25～27日に5～6群がレビャジエ湖で見られた。群の大きさは15～100羽であった。1914年5月16日にまだ氷でおおわれているレビャジエ湖で大群が観察された。

5月中旬までいくつかの群がサハリンの東海岸全体にわたって見られる。1948年にビリツン湾で巣がみつかった。今世紀の30年代にオオハクチョウはトウロイツコエ湖〔来知志バッコ沼〕で営巣しており、2巣が採集された(堀、1932)。現在この湖でオオハクチョウは春と秋の渡りのとき現れるだけである。20年代にはギリャコ・ウルクト湾で営巣したが、最近では繁殖してない。1950年には繁殖中のつがいがバルナク川の海岸から4～5kmの地点の州でみつかった(アレクサンドロフスキー地方、

ミシンの話による)。

千島列島では春と秋の渡りのときに多く、南千島ではときどき越冬する。1946年春オオホクチョウの湖に多かった(地元住民の話)。1947年11~12月にいくつかの小群がイズメナ〔泊〕湾(クナシリ島の南端)でみられた。越冬中のオオホクチョウが1930年2月にエトロフ島で記録されている(ベルグマン、1935)。千島列島では春と秋にオオホクチョウが数多く、定期的に渡るといふ報告がある(山階、1931)。

サハリン州の近隣地域では、オオホクチョウは、カムチャッカで営巣越冬し(ペロポリスキー、1947; アベリン、1949)、ギジガでは営巣し(デメンチェフ、1940a)、多分アムール川河口部でも営巣する。シュレンク(1861)はアムール川下流域でオオホクチョウの巣卵を発見した。1910年8月23日にアムール川河口で雌が採集された(チェルスキー、1915)。渡り時オオホクチョウは沿岸部全体の沿岸部全体にわたって普通であり(シュリピン、1936)、北海道の沿岸、日本列島の全体にわたって越冬する。

渡りの群は潟の浅瀬、河口湾入部、入江、大きな川の河口、浅瀬と海岸部が採餌や営巣に適したトゥロイツコエ湖やレビャジエ湖型の森林帯にある大きな湖に留まる。レビャジエ湖の採餌場では沿岸部の深さは50cm以内である。渡りの群のよい休み場は湾内で、アニワ湾、チャイボ、ピリツン湾、ウルクト湾などである。春に湾内にはオオホクチョウの餌となる Calanus が大量にあつまる。オオホクチョウは砂泥質の底土の深さ80~90cm以内のごく狭い範囲で餌をとる。営巣場所は灌木林や水辺の草の繁みでかこまれているような森林中の大きな湖である。

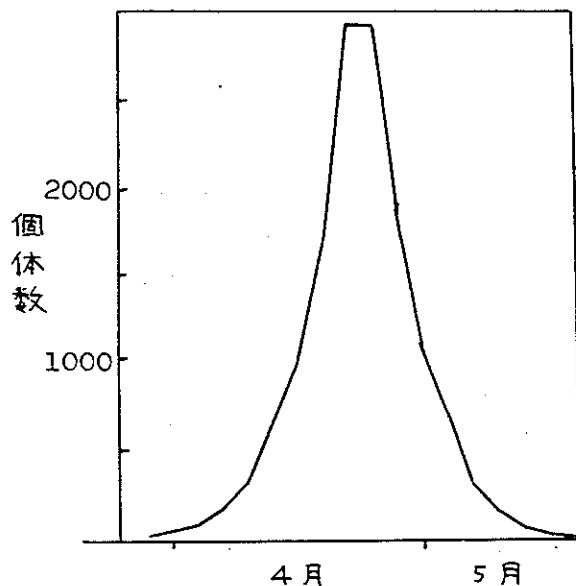


図2 1939年 アニワ湾におけるオオホクチョウの数の変化(岡田、1940)

トゥロイツコエ湖でオオホクチョウの巣は、沿岸のヨシ原で水深70~80cmの所でみつかった。サハリンの北東海岸沿いのいわゆる「ライダ」といわれる、ツンドラ状低地帯で営巣する。ここには森林や灌木林でかこまれた小さな湖沼が散在する。

サハリン南部で最初の群は、3月20~25日にアニワ湾で観察された。それよりやや遅れてレビャジエ湖には3月末に渡来した。最近3年間(1947、1948、1949)に大量の渡りは4月20~25日にアニワ湾、トゥロイツコエ湖、レビャジエ湖、ネフスコエ〔タライカ〕湖で見られた。5月上旬の末までに渡りはおわり、数つがまたは単独個体数羽が飛来しただけである。1947、1948、1949年の5月10日以降には飛来するものは見られなかった。春の渡りは非常に長期にわたる。多くのオオホクチョウがトゥロイツコエ湖に集まるが、ここには4月中旬に現れ、5月5~7日までいる。群は数百羽に達する。1948年4月15日にトゥロイツコエ湖に500羽の群が現れた。このときまだ氷がはっており、沿岸部の氷がとけていただけであった。群は5月初めまでいたが、新しい群が飛来して湖に留まり、群は次第に大きくなった。

サハリンにおけるオオホクチョウの春の渡りコースは2本の枝の型となる。その一つは北海道の西海岸からクリリオン〔西ノトロ〕岬へ飛び、その後アニワ湾の海岸沿いにススイ川河口に飛来し、ここで数日間留まり、それからサハリン西海岸沿いに海岸近くにあるトゥロイツコエ湖まで飛ぶ。毎年春の渡りのときさらに北部ではタタール〔間宮〕海峡の沿岸の湖でみられたが、バイカル湾ではみられなかった。オオホクチョウはサハリン西海岸からアムール川河口部へ飛び、それからオホーツク海沿岸へ向い、シャンタルスキー諸島を経てさらに営巣地へ向ったと考えられる。2番目のルートは、渡る数は少ないが、アニワ〔中知床〕半島の西海岸沿いにトンナイ〔窟内〕湖、ブッセ〔遠湖〕湖を通り、その後サハリン東海岸沿いにテルベニヤ〔タライカ〕湾まで飛ぶ。このコースではレビャジエ湖とネフスコエ湖で、さらにサハリン東海岸の全部の湾に留まる。

千島列島ではオオホクチョウは春に太平洋側もオホーツク海側も海岸沿いに飛ぶ。

サハリンの西海岸沿いを飛ぶオオホクチョウは、多分オホーツク海沿岸、アムール川下流地方で数多く営巣し、東海岸沿いに現れるものはシャンタルスキー諸島で営巣するであろう。この場合3月末にサハリンを通過し、4月初めにギジガに達するオオホクチョウは(デメンチェフ、1940a)、越冬地からもっとも遠くまで飛ぶことになるが、反対にサハリン南部を4月初めに通過し、4月19日にニコ

ラエフスク・ナ・アムーレ付近に達するオオハクチョウ（シュリビン、1936）はおそらく北海道で越冬するものであろう。

1930年にはトゥロイツコエ湖で20巢近くが数えられた。漁民の話によると、巢はネフスコエ湖でもみつかった。1923年にサハリン西海岸ウグレゴルス地方にあるトリ湖で1巢がみつかった。産卵は5月下旬であった。トゥロイツコエ湖で巢が6月5日にみつかり（堀、1932）、巢には綿毛が見られた。堀は2巢、一つは6月5日、もう一つを26日にみつけた。そのどちらにも6卵があった。卵の大きさは長径110.1~118.2mm、平均111.52mm、短径69.2~72.7mm、重量265~365.75g、平均317.60g（12例）であった。

ひなは7月上旬にかえる。ピリツン湾（サハリン北部）の北端で1947年5月中頃に、3卵のある巢がみつかった（地元住民の話）。

1947年秋にオネコタン島の住民が私に話したところでは、この島で7月に島南端の湖で営巣していると思われるオオハクチョウがみつかり、オオハクチョウが夏に千島で見られるという報告には疑いないが、営巣は少ないであろう。

秋では1949年10月初めにオオハクチョウがスス川とアニワ湾で見られた。ポポフの報告によれば、大量の渡りが見られるのは11月3~10日であるが、とくに多いのは11月5~6日である。数千羽の群が主としてアニワ湾に現れ、他の近くの湖には少ない。11月10日以降はいくつかの小群が渡来する。秋遅くに大群が根室海峡で見られ、2万羽がいた（ベルグマン、1935）。

サハリンを通過するオオハクチョウの数は、年によって変動するが、5000羽と算定できる。春の群の最大数は500羽に達する。

私の観察とアンケート調査によると、渡るオオハクチョウの数は5000羽までで、捕獲もされているようである。しかし古い資料によると数は多かった。19世紀中頃にサハリンのオオハクチョウは現在の数倍もいた。これらは南部の湖で数多く営巣していた。現在ではオオハクチョウは営巣せず、その数も非常に減少しているので、非常に価値のあるまれな種として保護する必要がある。そのためサハリン州でオオハクチョウの狩猟は禁止され、法律によって保護されている。

3. オオハクチョウの営巣地は旧北区の森林帯である。千島列島では秋と春の渡り時に非常に多い（山階、1931；ギゼンコ、1955）。1963年3月15日にクナシリ島のセルノヴォドスク村〔トウフツ〕近くで純白の成鳥と灰色の2羽の幼鳥が観察された。これらは南千島海峡〔クナ

シリ島とハボマイ諸島の間〕からベスチャノエ湖方面へ飛んでいった。この時期に湖はまだ氷におおわれており、オオハクチョウは急傾斜の南岸の雪がとけた所におりていた。

1930年2月に越冬中のオオハクチョウがエトロフ島で記録されている（ベルグマン、1935）。クナシリ島の猟師の話によると、オオハクチョウはこの島で見られるが、毎年のごとくではなく、凍らないキビヤシチ湖またはグリヤチエ湖とベスチャノエ湖の不凍部にいるという。北海道ではオオハクチョウが越冬する。例えば、1958年に根室半島の水域で約750羽が見られた（キース・吉井、1962）。

4. 1959、60年の冬にスジュヘ川河口付近で群が見られた。1月には11羽いたが、その後6羽に減った。3月にはそのうち1羽がイヌワシに捕食され、残りの5羽がこの地域に4月初まで留まり、渡来した20羽の群に合流して飛去った。地元住民によると、以前オオハクチョウはこの地域で越冬しなかったという。沿海地方で越冬するという報告は、ブルジュヴァルスキー・ヤンコフスキー（ウォロビヨフ、1954による）のものがある。朝鮮半島では西沿岸地帯の半島中央部、南部で越冬する（ウォン・ホング、1963）。1960年秋には10月5~11日にスジュヘ川河口で渡り群が留まった。これは7羽の群であった（成鳥3、幼鳥4）。オオハクチョウは川のわん曲部、河口近くの小さい湖で餌をとっていた。

10月24日5羽の幼鳥を含む17羽の群がスジュヘ上空を南西方向へ飛んだ。1961年秋のもっとも遅い観察例は11月19日であった。これは単独の幼鳥であった。

5.〔ケドロバヤ・パジ保護区〕でハクチョウ類はごく普通の渡り鳥である。しかし採集されたり、種類がはっきり判別できるほど近くで観察されたことはない。この地域ではかつてコブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウの3種が渡った。

前世紀末にはコブハクチョウがこの地方で営巣していた（タチャノフスキー、1893）。

6. ハサン地方における春の渡りで、オオハクチョウの大部分は北東方向へ飛び、一部が北方へ飛ぶ。1961年には数えたうち98%が、1962年には63%が北東へ向い、あとは真北へ向った。渡りの最盛日には北東へ飛ぶものが圧倒的に多かった。3~20羽の群がもっとも多く（図

表1 ハサン地方におけるオオハクチョウの渡り時期（シバエフ、1971）

	渡り開始	最盛期	渡り終了	期間
1961	3月17日	3月28日	4月8日	23日間
1962	3月24日	4月9~11日	4月19日	24日間

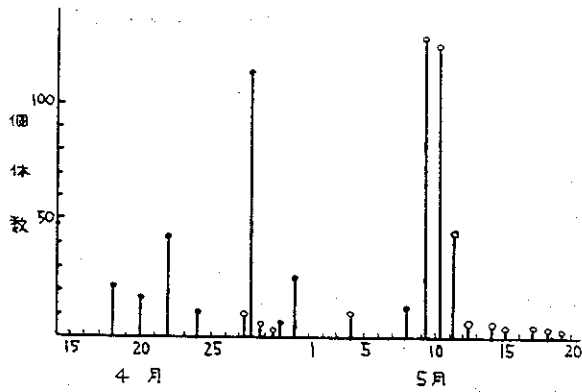


図3 ハサン地方におけるオオハクチョウの渡り。  
黒丸は1961年、白丸は1962年を示す。  
(シバエフ、1971)

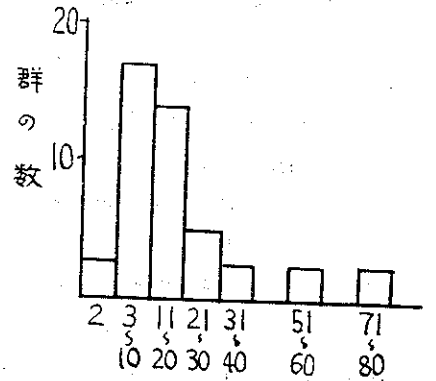


図4 ハサン地方におけるオオハクチョウの  
群の大きさ(羽) (シバエフ、1971)

4) 群の83%を占めた。大きな31~80羽の群は大量のオオハクチョウが渡る日に見られた。数えたうち36%は31~80羽の群で飛び、あとの53%は3~20羽の群で飛んだ。1962年には渡り最盛期の3日間に全体の90%が渡った。もっとも多く飛んだ日には全部で267羽が数えられた。

沿岸地域の低地帯における渡りでは、群は一度にまとまることはないが、海岸から内陸にはいるにしたがって渡りの頻度が高くなる。

オオハクチョウの大部分は、この地域で留まることはないが、小群がかん水湖や淡水湖、まれに湾に留まることがある。タリム湖で数10羽のオオハクチョウがおり、数日間留まっていた。この湖や他のかん水湖でも採餌しているオオハクチョウが観察された。

7. 南沿岸地方で春の渡りのときには普通の種である。春の渡りは3月下旬と4月上旬である。1898年には大群がおそらく3月17日から29日に渡った(これらの日にシジンで13羽がヤンコフスキーにより採集されている)。1909年には3月22日に15羽の群が観察され、主群が3月28日、最終群は4月9日であった。1913年には3月19日に9羽の群、4月4日に主群が渡った(メドヴェージェフ、1909、1913、1914)。1960年には4月22日に37羽の群が見られた(モンクガイ川河口)。1962年春では3月中旬にハサン湖に現れた。もっと大きな群が観察されたのは3月23日(5群で個体数は全部で75羽)、3月29日(大体同数)で、主群は4月2日であった(4時間で136羽、このうち一つの群は80羽)(リトヴィネンコ・シバエフ)。

1965年には、シバエフの私信によると、ハサン湖で主群の渡りは4月6日、最終個体は4月7日に観察された。

秋の渡りは10~11月である。1867年に最初に渡来したのは10月4日(ポシヨト湾)で、シジン地方の湖沼では10月30日で、その数は数千であった。大群が10月6日にウゴロヴァヤ近くの海上でも観察されている(プルジェ

ヴァリスキー、1870)。1962年にハサン湖ではオオハクチョウが10月中数回見られたが、この月の22日には約120羽が記録された。1964年には10月9日に初めて3羽が見られ、下旬に3~15羽の群が毎日渡った。観察最終日の11月21日には6羽の群が見られた(リトヴィネンコ・シバエフ)。また1960年10月18日(メルコヴォドナヤ湾で8羽)と1961年10月27日(20羽と7羽の群が沿岸を南に向って飛んだ)に観察されている。

これらの資料からも明らかなように、現在渡るオオハクチョウの数は比較的少ない、多分海岸より淡水湖のある地方をより多く渡るためであろう。

以上に紹介した文献は次のとおりである。

1. ウォロビヨフ K. A. 1954 ウスリー地方の鳥類。
2. ギゼンコ A. I. 1955サハリン州の鳥類。
3. ネチャエフ V. A. 1969 南千島の鳥類。
4. リトヴィネンコ N. M., シバエフ Y. V. 1971 スジュー保護区とスジュー河流域の鳥相。極東南部の鳥類とその生態127-186。
5. ナザレンコ A. A. 1971 「ケドロバヤ・バジ」保護区の鳥類。極東南部における鳥類研究 12-51。
6. シバエフ Y. V. 1971 ハサン地方南部におけるガン・カモ類の春の渡り。同上155-169。
7. バノフ E. N. 1973 南沿海地方の鳥類。(北海道立林業試験場)

## ソ連極東南部のハクチョウ(II)

前回にはオオハクチョウについて紹介したが、今回はそれにつづきコハクチョウと迷鳥として記録されているコブハクチョウについて紹介する。

### コハクチョウ

1. コハクチョウはウスリー地方の渡り鳥である。おそらく海岸沿いにも内陸を通っても渡るであろう。

ソ連科学アカデミー動物学研究所のコレクションには、ヤンコフスキーから送られたシデミ産の7個体の標本がある。これらは1898年の3月22日～30日に採集された。このうち1個体は1909年4月21日にハンカ湖畔のトッロイツキー付近でチェルスキーにより採集された。

東部のコハクチョウを地理的な別亜種 *Cygnus bewickii jankowski* Alph. とするには十分な根拠がないように思える。

この種の通常の分布域は旧北亜区のツンドラである。

2. [アメリカコハクチョウは] 1948年4月にススイ川河口近くのアニク湾でハクチョウが採集された。ネズミに嘴を切りはなされたこの標本は、猟師が科学アカデミーサハリン支部にもってきたものである。標本の測定値は次のとおりである。翼長 560mm、尾長 172mm、跗蹠長 110mm、中趾は爪を含めて 135mm 爪なしで 115mm である。翼式は 1 > 2、初列風切は三列風切とほとんど同長で、2 > 3 でその差 4mm、3 > 4、4 > 5 でその差 54mm である。嘴は報告されたところでは黒である。すなわち全体に暗煙色、というよりはむしろ鉛灰色である。これは明らかにアメリカコハクチョウである。アメリカコハクチョウは以前コマンドル諸島で採集されており、アナジールではまれに渡り鳥として観察された。このハクチョウは北アメリカの北極地方、北部森林帯で繁殖し、カリフォルニアで越冬する。

[コハクチョウは] サハリン州では渡りのときだけ見られる。私はサハリン南部で一度1947年4月6日にアニク湾で見たことがある。この7羽の渡り群は、オオハクチョウの群から離れていた。若い雌が1949年5月8日ネフスコエ湖で採集された(ヴォルコフ採集)。モスクワ大学動物学博物館に保存されている標本のラベルには、「渡りのとき採集された」と記されている。

コハクチョウが渡りのとき、サハリンの湖沼や湾に定期的に渡来することは明らかである。私は、サハリンにおける繁殖の記録をもっておらず、文献にも記録は見られない。コハクチョウはクナシリ島と北海道間の海峡でオオハクチョウと一語に越冬すると思われ、このことに関しては日本の文献に述べられている(大淵、1936)。

3. コハクチョウの分布域は、西はノヴァセ・ゼムリヤから東はコソマ川デルタ地帯までの旧北亜区のツンドラ、一部の森林ツンドラである。コハクチョウは北海道、本州、九州で越冬する(オースチン・黒田、1953; 日本鳥学会1958)、千島列島では越冬中のコハクチョウがクナシリ海峡で見られた(大淵、1936)。

5. [ケドロバヤ・バジ保護区のコハクチョウについては第1報の5を参照のこと]

7. ヤンコフスキーは1898年の春にシジミで20個体のハクチョウを採集したが、そのうち13個体はオオハクチョウ、7個体はコハクチョウであった。この事実は、コハクチョウが南沿海地方でまず普通の渡り鳥であろうとすることを示している。おそらく、野外におけるハクチョウ類の種の識別が困難なために、その後の研究者はコハクチョウを記録していない。オオハクチョウであったとした観察例の一部がコハクチョウである可能性もある。ヤンコフスキーの標本を調べると、コハクチョウの春の渡りはオオハクチョウと大体同時期である。オオハクチョウは3月17日から29日の間に採集されており、コハクチョウは3月22日から30日の間に採集されている。

オースチン(1948)の資料によると、コハクチョウは北朝鮮で渡りのとき普通である。1個体が冬1月11日にこの地域で採集されている。

### コブハクチョウ

1. かつてコブハクチョウは南沿海地方の大きな湖で繁殖していた。ヤンコフスキーの資料によると、コブハクチョウは日本海沿岸南部で普通であった。タチャノフスキーはシジミで1個体(成鳥雌)と6卵を採集した。

聞き込みの資料によると、コブハクチョウは比較的最近までハンカ湖で繁殖していた。この地域では最近の研究者は誰もコブハクチョウを見ていない。しかし、このことはコブハクチョウが生息しないということではなく、ハンカ湖東側の広大な湿原や小さな湖沼に近づけないためであるといえよう。私の知る限りでは、この地域に入った鳥学者はいない。現在ではコブハクチョウの繁殖はハンカ湖の北岸で非常に可能性がある。

5. [ケドロバヤ・バジ保護区のコブハクチョウについては、第1報の5を参照のこと]

6. [ハサン地方で] 1962年3月30日に観察された3羽は、コブハクチョウと思われる。

以上に紹介した資料の出典は第1報と同じである。館報No.236の第1報末尾の文献表を参照されたい。(帯広畜産大学)

# ソ連におけるコハクチョウの現状

藤 卷 裕 蔵

最近ソ連の稀少哺乳類、鳥類に関する本が出版された(ジルノフほか 1978)。この中からコハクチョウについて紹介する。

コハクチョウの繁殖地はコク半島のペチェンガ川から東はコリマ川まで、少数はチュコト半島のコリュチンスク湾でも繁殖する。北は北氷洋沿岸までであるが、ノバヤ・ゼムリャの南部・コルグエフ島・バイガチ島にも分布している。南は森林ツンドラまでであるが、所によってはさらに南まで広がっている。例えばタザ川沿いでは  $66^{\circ}$  まで、エニセイ川沿いでは  $68^{\circ}$  までである。

ソ連における生息数は、ウスペンスキーによると 1950 年代には全体で 10,000 つかいであつたという。1968 年にヤマル半島では 700—750 つかいが繁殖し、総数は 2,600 羽、1969 年にグダン半島では 1,300 つかいが繁殖し、総数は約 3,000 羽であつた。飛行機による調査では、1960 年 8 月インジギルカ川下流部では 10 km<sup>2</sup> に 0.07—0.08 羽、1963 年 8 月レナ川デルタ地帯で 1.7 羽、ヤナ川とインジギルカ川間の総数は、14,700 羽であるとしたが、3,032 km<sup>2</sup> の飛行で 262 羽しか観察されなかつたので、彼の推定値は過大と思われる。

バルト海沿岸を渡るコハクチョウの数は 1960 年代に増加したが、これは渡りコースや越冬地が変化したためと思われる。バルト海西部でコハクチョウは春より秋に多いが、東部のエストニアでは秋に少ない。ヨーロッパ北西部(アイルランドを除く)で越冬するコハクチョウの数は、1967 年冬には 5,880、1968 年には 4,930 であつた。主な越冬地はイギリス・アイルランド・オ

ランダで、イギリスでは 1965 年までは 600 羽が越冬していたが、最近では 1,300 を下ることはない。繁殖地東部のもののうち 1970 年以来約 1,000 羽は日本で越冬する。

コハクチョウは湖沼が散在するツンドラや川沿いに営巣する。営巣地に帰ってくるのは多くの地域では 5 月中旬から後半にかけて雪のとけはじめるころであるが、タイミール中部では 6 月上旬である。産卵は 5 月末—6 月初旬であるがタイミールでは 6 月中旬—末である。産卵数は 2—5 で、2—3 卵の例が多い。雌だけが抱卵し、29—30 日目の 7 月中旬にふ化する。幼鳥は大きくなると大きな湖沼に移り、8 月末—9 月初旬には飛べるようになる。そして 9 月には繁殖地から去りはじめる。バルト海では渡り群のうち当年の若鳥は 27—47% であるが、越冬地のイギリスでは 30% である。

最近コハクチョウの数は減少している。最近 10 年間でタイミールだけでも繁殖個体数は  $1/7$ — $1/10$  に減少した。ソ連ではコハクチョウの捕獲はまったく禁止されているにもかかわらず減少の原因の一つに密猟があるので保護のためには営巣地を禁猟区にする必要がある。